

あとがき

中原浩大の作品は見かけは大きいながら、けっして力まかせではなく、妙な魅力を持っている。なるほど作品は彼の名の示すように大きい。しかし本人は大きさにさほどこだわっているわけではない。案外二次的な問題なのかと思えてくる。大きくしようとして大きくなっているのではなく、あたかも結果として大きくなったに過ぎないと言わんばかりだ。

制作における彼は大胆である。最初からあまり細かいところまで計算しているわけでもないようだ。しかし発想と素材の結びつき方が絶妙なので、すべてがあらかじめ周到に仕組まれていたかのように見える。

着想はたしかに奇抜であるが、つねに無理のないリアリティが感じられる。ある種の「優しさ」とでもいうようなものが漂っているのも彼独特の不思議さを側面から支えている。

この現代の奇想派は現実空間に作品をどのように着地させているのだろうか。どうやら作品を現実化するために着地点を探して降りてくるというよりは、作品が己れの肉体の分身であるかのようだ。常に変容したい己れの肉体がある。その奥には意識、あるいは夢がひそんでいる。それらが混然一体となって、作品のすみずみにまでいきわたってむくむくとふくれあがってくる。そういうイメージが彼の作品にはある。

私が彼の作品を好ましく思うのは、小手先の造作にこだわらず、その場のぎのデザインに陥らず、確かに奇抜かもしれ

ないが、何らかの飛躍を経た上で獲得したに違いない「自然」な感じを持っているからだ。

彼は学生時代、作品を発表し始めて数年で、いわゆるインスタレーション的手法に見切をつけてしまった。それはまるで夢のおもちゃ箱を部屋一杯にぶちまけたかのような印象のものであったが、夢の磁場はそういうものではない。どこにでもいつでも発生し得るものでなければいけない。「光」が目に見え、手で触れることができるものだと確信したとき、彼の夢はどこへでもいつでも持ち運び自在になった。そしてそれがそのままこの東京の地下にも出現するのを楽しみにしている。

1988年8月5日

佐谷画廊

佐谷周吾

付記

今回の展覧会に出品される作品はカタログno.4の「カタクリトギフチョウⅡ」とno.5の「コウダイノモルフォ」である。カタログno.1～3は参考図版であり、カタログno.1は1986年の原美術館における第6回ハラアニュアル展、no.2は1987年の山口県立美術館における「今日の立体」展、no.3は1987年の小原流会館における平行芸術展に出品されたときの撮影である。